令和七年度　全日本中学生水の作文コンクール愛媛大会

優秀賞

「水があることは当たり前？」

新居浜市立中萩中学校　三年　塩崎（しおざき）　悠花（はるか）

私の家にはウォーターサーバーがあります。そのため、夏でも冬でも常に冷たい水を飲むことができます。部活終わりに汗だくで帰宅したときやお風呂上がりなど、毎日お世話になっています。飲料水に限らず、水道をひねれば綺麗で清潔な水が出てきます。

ある日、いつものように何気なくテレビを見ていると、一つのコマーシャルを目にしました。それは、体の弱い母親に代わって、まだ幼い少年が自宅から遠く離れた場所にある井戸に水を汲みに行くという内容のものでした。その少年は水汲みや家族の世話で精いっぱいで、友だちと大好きなラグビーをして遊ぶことすらできません。しかも、苦労して得た水は濁っていて、とても清潔だと言えるようなものではないのです。実際、世界人口の約四分の一にあたる二十二億人が井戸や川、池から汲んだ水を使用して生活しているそうです。水が私にとってごく身近で安全な存在でも誰かにとってはそうでないことを、分かっていたはずなのに改めて実感させられました。また、水汲みは主に女性や女の子が行うそうで、それに費やす時間によって教育や経済活動の機会が奪われていることもあるらしいのです。私は水を得るために何かを犠牲にした経験がないため、その事実に驚愕しました。綺麗で清潔な水がいつでも手に入ることが当たり前ではないと、あのコマーシャルのおかげで気がつくことができました。

もしも水がなければ、お風呂には入れないし、洗濯もできない、料理だってままならないでしょう。その他にも水がなければ不可能なことは数えきれないほどあります。それほど、水は私たちが日常生活を送る上で必要不可欠な資源なのです。しかし、水は無限にあるわけではありません。日本の一人あたりの水の使用量は一九六五年時点で一

日約一六九リットルでした。しかし、一九九五年度には一日約三二二リットルとなり、三十年間でほぼ倍増しているのです。その原因としては、人口の増加や水を使用するお風呂や洗濯機などの家電の発展が挙げられます。現在、地球上に存在する水約十四億立方キロメートルのうち、人間が使用することができるのはたった〇・〇一パーセントだそうです。私たちが何も考えず今のまま使い続けると、いつか必ず使用できる水が底をついてしまいます。それを防ぐためにはやはり、節水が必要となります。節水とは、無理に水を使わないようにすることではなく、必要以上に水を使わないようにすることです。私自身、油で汚れた鍋を洗うときに水を注ぎ続けながらこすっていて、母に「水がもったいないよ。」と注意されたことがあります。それからは油などの汚れはお湯につけておいて、ある程度落ちやすくしてからこするようにしています。

私たちの生活では水が身近な存在すぎて、そこにあるのが当たり前かのようになってしまっている気がします。実際、日本は世界でも珍しい、水道水でも飲めるほど水の安全性が確保されている国です。現在、ＳＤＧｓの十七の目標の中には、「安全な水とトイレを世界中に」というものがあります。あのコマーシャルの少年のように私たちにとっての普通が世界を見渡すとそうではないのです。これらのことを思うと、水を無駄にするような行為は控えるべきだとより一層強く思います。水を使いすぎることは、地球を苦しめることであり、未来の自分たちを苦しめることでもあります。節水を心がけ、未来に水をつないでいく。それを実現するためには多くの人の節水の意識と地球への思いやりが必要です。一人一人の小さな意識の積み重ねが、限りある資源である水を守ることにつながるのだと思います。私はその第一歩となれるよう、綺麗な水を使えることが当たり前ではないということを常に頭に置いてこれからの日々の生活を送っていきたいです。